



藤前干潟活動センター



干潟観察会

「ラムサールシティ・ナゴヤ」に期待します

特定非営利活動法人藤前干潟を守る会／ラムネットJ理事 亀井浩次

今年1月、ラムサール条約第64回常設委員会において名古屋市の「ラムサール条約湿地自治体認証」の申請が承認されました。国内では新潟・出水に続く3件目となり、7月にジンパブエで開催されるCOP15で認証される予定です。認証の理由として「藤前干潟の保全」が大きく評価されたことは、同所の保全に長く関わり、現在もフィールドとしている私たちにあって喜ばしいことですが、重要なのは「認証自治体として何をやるか」です。今回の認証を機に現状の問題点が改善されることを期待しています。

とりあえず喫緊の課題として「現地施設の開館計画」の問題があります。藤前干潟周辺には現在、環境省が2005年に設置した拠点施設「稲永ビジターセンター」と「藤前干潟活動センター」があります。両センターあわせて環境省が毎年管理業務を外部委託しています（開設以

来当会が受託）が、環境省の予算削減により来年度藤前干潟活動センターの開館日が大幅に減らされることになりました。利用者の少ない冬期間の全面休館に加え、空調設備故障のためとして4・5月も休館とされています。ラムサール自治体認証で関心の高まっている時期の休館増は施設の利便性を大きく損なうため、現在善処を求めているところ（ラムネットJからも要望書を出しました）ですが、問題の原因は環境省の予算に全面的に依存している現状にあります。

藤前干潟保全の経緯についてはご存知の向きも多いと思いますが、名古屋市の廃棄物処分場として埋め立てを計画していたところ、保全を求める市民運動との間で論争となり、最終的に1999年、環境庁(当時)の介入によって保全が実現したものです。市としては本意な形での決着となったため「保全事業は環境省のみで行う」という方針で

認証による関心の高まりを想定して利便性を確保するのは市の責任ともいえます。今回の認証を機に、市としても環境省と協力して安定した施設運営を行うよう方針転換を期待したいところです。

上記とも関連しますが、藤前干潟活動センターの利用者が少ない要因に「交通の便の悪さ」があります。名古屋市営バスの停留所は直近(日光川公園/毎時1本)でも1km以上離れており、本数の多い停留所(南陽交通広場)だと3kmほどの距離があります。以前は三重交通のバス停が直近(南陽町藤前/約800m)でしたが毎時3〜4本あったのが減便により1日2本とほぼ利用できません。現状では車による来場がほとんどです。市の環境政策として「公共交通機関の利用」を推奨していることを考えても、少なくとも「公共交通による来場」という選択肢を保障することは湿地自治体としての責任ではないでしょうか。現行の路線を多少延長して「藤前干潟」停が新設されるようこれも改善を期待しています。

各地のフィールドと共有できるところとして、渡り鳥コアジサシの営巣地確保の問題があります。藤前でも以前は春になると多数飛来し、水面でホバリングしながら採餌する姿がおなじみの風景になっていました。当時大規模模造コローニが作られていた造成地が輸出用自動車置き場となつて以降はめっきり見られなくなり、春先に飛来しても営巣地が見つから

ずどこかへ行ってしまうという状況が続いていました。新たな営巣適地が確保できないかと模索していたところ、

ある年に珍しくまとまった数の個体が残っていることがあり、調べると干潟南東部に隣接する「空見スラッジセンター」(下水汚泥処理施設)の駐車場用地にコローニができていました。名古屋市上下水道局の施設なので市に営巣地としての確保を要望しましたが、「現在は使っていないが将来的に使う計画(商業施設の臨時駐車場として貸し出し)がある」として拒否されました。コアジサシの営巣に必要なのは4〜7月の4か月間のみであり、調整によって何とかできるのではないかとはいえませんが、かえって営巣実績を作らせないよう防止策が講じられている状況です。

上記にあげた交通アクセスの問題は交通局、コアジサシ営巣地の問題は上下水道局の管轄で、それぞれの部局の論理を優先させる「縦割り行政」の弊害ともいえます。「自治体認証」は市全体にかかわることなので、部局を越えたとりくみで解決をはかってほしいものです。今後、名古屋市が「認証自治体として何をやるか」に期待したいと思います。



コアジサシ営巣状況(空見スラッジセンター)

辺野古・大浦湾アップデート

ジュノン保護キャンペーンセンター / Okinawa Environmental Justice Project 吉川秀樹

豊かな生物多様性を誇る辺野古・大浦湾で米軍新基地建設が進行されている。浅瀬である辺野古側での埋め立てはほとんど終わり、現在、工事は大浦湾側に移行。昨年8月から今年2月までに、護岸造成のために約140本の鉄管が、地盤改良のために約300本の杭が打ち込まれた。面積では約27%、土砂量では予定の17%の埋め立てが進んでいる。しかし地盤改良工事は難関であり、基地の完成は早くても2037年だとされている。基地建設はなぜここまで進んだのか。私たちは辺野古・大浦湾をどう守れるのだろうか。

危険種を含む5300種以上の生物が生息していることが明らかになった。しかし同時に、そこを埋め立て、飛行場を建設しても「環境に影響を与えない」と日本政府は結論づけた。

2014年7月に陸上工事が、2018年12月には埋め立て土砂の投入が始まる。政府は、独自のモニタリング調査をもって、工事による環境への影響はないとし、工事を継続。工事の強行は、普天間の危険性除去には「辺野古が唯一の解決策」というナラティブの確立へとつながった。



宜野湾市にある米軍普天間飛行場の「危険性除去」の解決策として、辺野古・大浦湾での新基地建設計画が最初に発表されたのは1997年。あれから28年の年月が経つ。数回の計画変更を経て行われた環境アセス(2009〜12年)では、同域に262種の絶滅

の杭を水面から最深で70m打ち込むなどの「設計変更」を沖縄県に申請。またしても、工事は「環境

に影響を与えない」と主張した。2021年11月、玉城デニー沖縄県知事は、地盤改良工事やジュゴンへの影響の検証は不十分であり、辺野古は普天間の解決にはならないとし、申請を不承認とする。しかし2023年12月、裁判所が知事の承認を違法とし、政府が「代執行」という手段を使い設計変更を承認。大浦湾での工事が再開され、上記した状況に至っている。

悔しいことに、市民や環境NGOが指摘する環境への影響は政府によりほとんど無視されてきた状態だ。環境省は「防衛省が法令に準じて対応していると承知している」とし、独自の見解を示せていない。一方、軟弱地盤問題の発覚以降、米側から軍事戦略の視点で懸念

が示されている。まず有力シンクタンクが建設計画の実現性を問題視する報告書を発表し、2023年9月には在沖米軍高官が軟弱地盤上の飛行場の運用への懸念を表明。2024年6月には、連邦議会下院軍事委員会の議員が米国会計検査院に対して、日本政府の設計変更承認があっても「問題は対応されていない」とし、軟弱地盤による運用への影響や完成時期について独自の調査を求めている。今年2月の石破首相とトランプ大統領の共同声明では、これまでの

共同声明では示されてきた、辺野古が「唯一の解決策」の文言が消えていた。同建設計画の根幹がゆらいでいるとも解釈できる。

辺野古・大浦湾を守るには、軟弱地盤をめぐる軍事戦略の視点と環境保護の議論を結びつけて、国内外の世論を喚起し、辺野古NGOの政治判断につなげていくことが必要だ。沖縄での環境NGOの取り組みは続く。

※この報告における米側情報の出典は以下のリンクから確認できます。
<https://okinawaejp.blogspot.com>



大浦湾と工事船 (2025年3月1日)



新基地建設反対集会 (2025年3月1日)

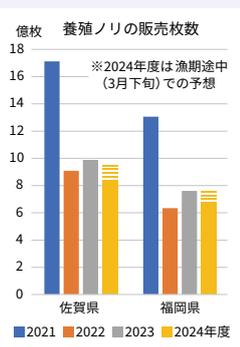


辺野古陸上から見える杭打ち船 (2025年3月12日)

有明海奥部で3年連続の養殖ノリ大不作

有明海漁民・市民ネットワーク 矢嶋 悟

有明海の佐賀県と福岡県でノリの不作が続いています。2024年度の販売枚数は佐賀県が9億枚、福岡県が7億枚台にとどまり、福岡県が7億枚台にとどまり、2021年度より3年連続で減少しているという不作が3年続いていることになり、これは「有明海異変」と言われるようになった2000年度の大不作に匹敵する事態です。不作の原因として少雨が取り沙汰されていますが、赤潮の影響も



このような異変への対応として求められてきたのが諫早湾の開門調査です。しかし国は開門を実施せず、その代償として今年から10年間にわたって漁業団体に100億円を交付する「有明海再生加速化対策」を行うとしています。これまでも国は多額の有明海再生対策費を注ぎ込んできましたが、漁獲量は回復していません。「再生加速」どころか、有明海では環境の悪化が加速しているのです。

きらら浜自然観察公園（山口県）

きらら浜自然観察公園 レンジャー 信木 愛

きらら浜自然観察公園は、山口県山口市南部に位置し、瀬戸内海の山口湾に面している公園です。元々は戦後の稲作の場として整備された阿知須干拓地の一部でしたが、実際は農地として利用されることはなく、しばらく放置されている間にヨシ原や草原が生まれ、動植物の宝庫となりました。1987年から土地の有効活用のために再埋め立て工事が始まり、保護団体の方々の「この自然を残してほしい」という声から

を観察することができます。公園の北側にある展望棟からは、隣接する山口湾の様子も観察することができます。



公園と山口湾



ベッコウトンボ



干潟で生きもの探し

286haの内、北側の30haの自然を残すことになりました。そこへ作られたのがきらら浜自然観察公園です。2001年4月27日に開園し、かつての阿知須干拓地に生息していた野鳥を中心とする多様な生態系が保全されています。園内には干潟・ヨシ原・淡水池・汽水池・樹林帯の5つの環境があり、1年間で約140種もの野鳥

を観察することができます。公園の北側にある展望棟からは、隣接する山口湾の様子も観察することができます。干潟は絶滅危惧種のクロツラヘラサギやスグロカモメなどの野鳥や、カブトガニなどの貴重な生物、周辺のヨシ原は絶滅危惧種のベッコウトンボなど、貴重なものを含めたさまざまな生きものの生息地となっています。

当公園では、野鳥や干潟の生きもの観察会など1年に100回以上の自然に関するイベントを実施しており、来園者に自然の大切さや面白さを伝える活動を行っています。また、地元の園児・小学生たちに自然とふれあうプログラムを提供し、環境教育の場としても利用されています。さらに、クロツラヘラサギの保護にも力を入れており、2018年日本で初めてクロツラヘラサギ保護・リハビリセンターを開設し、病気や負傷した個体を一時的に保護できる体制をとっています。また、年2回山口湾の海岸清掃も実施し、環境保全活動も行っています。

現在、山口湾の自然を守るため、ラムサール条約湿地登録を目指しています。

岡山県でのコアジサシの繁殖地保全に向けた取り組みと課題

たましま干潟と鳥の会 / ラムネットJ理事 西井弥生

昨年9月、日本鳥学会2024の自由集会では、「コアジサシ国勢調査」が行われました。

その際、2024年のコアジサシの飛来数は5500羽、巣立ち羽数は280羽と推定され、非常に危機的であることがわかりました。

アジサシの生態についての説明会も開き、30人以上の社員が参加しました。

この取り組みは2025年2月、地元紙の山陽新聞にも掲載され、記事の中でNPO法人



岡山県内の企業の敷地で子育て中のコアジサシ



協力企業により現地に設置された啓発用看板

「行政との協働では、2024年に岡山県備中県民局水島港湾事務所（以下、水島港湾事務所）と連携し、非工事業リアでデコイ（模写）によるコアジサシの誘引を試みました。

実現しました。アンケート結果では、参加者全員から「恒久的な繁殖地が必要！」との声が寄せられました。

岡山県倉敷市玉島地域を中心に活動している、たましま干潟と鳥の会（以下、当会）では、2023年から、所有する空き地でコアジサシが繁殖し始めた岡山県内の企業と協働し、繁殖期（4月下旬～8月上旬）の立ち入り禁止措置、繁殖状況の確認、そして社内向けに「コアジサシ通信」の発行を行っています。また、お昼休みに食堂から営業状況を観察できるように、フィールドスコープの貸し出しも実施。6月には、当会の活動やコ

「行政との協働では、2024年に岡山県備中県民局水島港湾事務所（以下、水島港湾事務所）と連携し、非工事業リアでデコイ（模写）によるコアジサシの誘引を試みました。

一連の協働を終えた後、水島港湾事務所が2024年10月に作成した「水島港（玉島地区）公有水面埋立事業に係る環境影響評価書に基づく環境保全措置の実施状況報告書」では、今後の環境保全措置の内容として、「岡山県としては、コアジサシが工事箇所で営巣しないよう、（中略）「たましま干潟と鳥の会」に意見を聞きながら繁殖環境への影響を可能な限り低減するよう努める。」と明記されました。

コアジサシ通信2024 Vol.3

昨年、観察にお邪魔するたびに数を減らしていたコアジサシ。このことがあったのであまり期待しないようにしていたのですが、今回の調査では驚きの結果が...。11このまま何事もなまかたわいひびがたくさん姿を見せてくれるといいなと思います。

水たまりで遊ぶしなみ整え中。公園に少し近づくと、コアジサシの姿を見ることが出来ます。観察ポイントが分かりやすいのでぜひご来場ください。

今回は、ニューフェイスのコチドリがいました。調べてみるとコアジサシと似たような羽色で、観察ポイントが分かりやすいのでぜひご来場ください。

あらゆる主体の参加と協働

岡山県倉敷市玉島地区、行政とあらゆる主体が協力し、恒久的な繁殖地を創出。環境保全活動の推進に貢献しています。

ECO VISION2040 岡山県環境政策推進課

当会の定例会です。今年、たましま干潟と鳥の会では、岡山県備中県民局水島港湾事務所、実業家団体、倉敷市環境学習センターと協力しながらコアジサシの繁殖地保全を実施します。定員があと少しとなりましたが、もしご参加をご希望の方はお申し込みをお願いします。こちらのQRコードからどうぞ。

開催日時：5月30日（木）13:00-15:00
 場所：岡山県備中県民局水島港湾事務所（水島港）
 参加費：無料（お弁当2食、他10食、コチドリ1、ハクセキレイ1、ヒバリ1、カラス2、トビ1、ミサコ）
 今後の見込み：前回は2倍近く、観望を兼ねて参加していただきました。コアジサシの数は前回は多く、交尾しているペアも見られました。カラスは1度侵入して低空飛行しましたが、職員がモジング（追い払い行為）して撃退していました。6月10日前後でヒナの姿が見えるのではないかと期待しています。

協力：たましま干潟と鳥の会

「コアジサシ通信」の一例

装は地域の小学生向けワークショップとして実施し、その後、現地で観察会も開催しました。この連続講座は倉敷市環境学習センターの協力により

三番瀬の人工干潟計画について
市川市に質問書を提出

千葉県市川市は、三番瀬の浅海域の一部を埋め立てて人工干潟を造成する計画を発表しています（本誌57号参照）。この計画は多額の税金をつぎ込んで行われるものですが、三番瀬の環境を改善するどころか悪影響を与える可能性があります。

そこでラムネットJは、市川市に対して2025年1月29日付で質問書を送付。2月20日付で市川市からの回答が届きましたが、それは質問に対して明確な回答を避けるものであり、特にラムネットJが指摘したラムサール条約「湿地再生の原則とガイドライン」との矛盾点などに対してはひと言も言及されていません。ラムネットJは、今後も市川市との交渉を続ける予定です。

第19回 日韓 NGO 湿地フォーラムのご案内

ラムネットJでは、韓国湿地NGOネットワーク(KWNN)との共催による日韓NGO湿地フォーラムを、日本と韓国で毎年交互に実施しています。第19回のフォーラムは渡良瀬遊水地がある栃木県小山市に韓国からの参加者を迎えて開催します。

今回は「コウノトリと歩む湿地の未来」と題して日韓のコウノトリ保護に関する発表が行われるほか、気候危機克服のための湿地の保全・再生と炭素隔離、空港と渡り鳥の問題などについて報告やディスカッションを行う予定です。皆さま、ぜひご参加ください。

- 日時：2025年4月12日(土) 13:00～18:00
- 場所：小山市生涯学習センター ギャラリー
栃木県小山市中央町3-7-1 ロブレ6階
- Zoomによるオンライン参加も可能です。参加ご希望の方は、以下のURLまたはQRコードのウェブフォームからお申し込みください。
<https://forms.gle/XzpnQScJ9LgWr994A>
- お問い合わせ：ラムネットJ事務局
Eメール info@ramnet-j.org



水のつながり、命のつながり。
湿地のグリーンウェイブ2025開催！



「グリーンウェイブ」は、生物多様性条約事務局の呼びかけによって始まった、生物多様性の向上を目的とする国際的なキャンペーンです。この取り組みを湿地にも広げるために、ラムネットJでは毎年、5月22日の「国際生物多様性の日」を中心とした数カ月間、湿地保全キャンペーン「湿地のグリーンウェイブ」を登録団体を募って展開しています。今年も「湿地のグリーンウェイブ2025」として、4月から7月にかけて、自然観察会、田植え、清掃活動、外来生物の駆除、学習会など、湿地に関連した登録団体のイベントが全国各地で行われます。配布中のリーフレットには、各団体の活動内容の紹介や昨年のイベント報告、ラムサール条約COP15に関連する話題などを掲載しています。



湿地のグリーンウェイブ
2025のリーフレット

また、ラムネットJでは湿地のグリーンウェイブの一環として「オンラインお茶会」を毎月開催しています。4月23日(水) 20時から、湿地のグリーンウェイブ2025のキックオフとして、今年の登録団体の方に登場していただく予定です。なお、今年から湿地のグリーンウェイブのホームページのURLが変更になりました。最新情報やイベントの詳細などは以下のページをご覧ください。 <https://www.ramnet-j.org/wgw>



2025年度ラムネットJ会費納入のお願い

ラムネットJは4月から新年度となります。会員の皆さまには、このニュースレターに同封して郵便振替用紙をお送りしましたので、2025年度の年会費の納入をお願いします。会員や会費に関する詳細は下の「会員募集」案内をご覧ください。

クレジットカードでの送金をご希望の方は、右のQRコードまたは以下のURLから決済サイトのSyncableをご利用ください。



<https://syncable.biz/associate/RamnetJ>

Syncableに登録済みの方は、毎年4月1日に自動更新、カード決済となりますので郵便振替用紙はお送りしておりません。どうぞよろしくお願いいたします。

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集 !!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<https://www.ramnet-j.org/join/>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable(シンカブル)からクレジットカードで送金することも可能です。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本
(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ) 店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員	賛助会員
	総会での議決権があります	総会での議決権がありません
一般	1口 5,000円	1口 2,000円
団体	1口 10,000円	1口 10,000円
特別	50,000円以上	30,000円以上
企業	-	1口100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2~3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org